

## 書 評

岩鼻通明 著：『出羽三山の文化と民俗』

岩田書院 1996年8月

193ページ 2,300円(本体)

1992年に『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』(名著出版刊)を著し、既出の出羽三山信仰論文を一書にまとめていた著者が、今回これに次いで、2冊めの出羽三山に関する著書を公刊した。本書『出羽三山の文化と民俗』がそれで、構成は、次のように序論と四つの章からなっている。

序 論

第一章 日本の山岳信仰と出羽三山

第二章 出羽三山信仰の拡がり

第三章 出羽三山参詣の道

第四章 出羽三山信仰の諸相

新たに書き下ろされたのは序論のみで、他の各章は、『西川町史 上巻』・『村山民俗』・『山形民俗』などに書かれた多数の論考に手を加えて、四つの章に編集したものである。いずれの論考も、1992年7月以降に刊行されたものであり、本書は、前著『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』出版以降の、出羽三山に関する著者の研究成果をまとめたものと言うことができる。

さて、内容の紹介に入ると、序論では、本書が「出羽三山信仰の全体像を地理学的に体系化することを目指したものである」と、著者の研究スタンスが述べられる。具体的には、信仰の対象となる山岳を、周辺地域から参詣者を集める中心地と考え、中心(山)―周辺(里)の観点から山岳信仰を考察する。そして著者は、山岳信仰の中心―周辺関係を、聖域圏・準聖域圏・信仰圏の三つの領域からなる圏構造として把握しようとする。このうち、著者が最も力点を置いているのが信仰圏であるという。以上の著者の基本的立場は、前著と同じである。

「第一章 日本の山岳信仰と出羽三山」は、『日本の仏教』6と『日本宗教民俗辞典』用に書かれた論考に基づいており、古代から近代に至る日本の山岳信仰および出羽三山信仰の概説である。

「第二章 出羽三山信仰の拡がり」は、おもに『西川町史 上巻』所収の論考によっている。著者は、出羽三山の信仰圏の調査方法として、①各宿坊・各集落の檀那場を調べて集大成する、②日本各地の出羽三山信仰の存在を調べる、③出羽三

山神社の末社、出羽三山の石碑、講の分布を調べる、の三つを挙げる。そして、第一節「檀那場の分布」で①の方法が、第二節「末社、石碑、講の分布」で②が、第三節「三山信仰の民俗」で③が用いられる。ただし、①檀那場の分布は、初出が『西川町史』であることもあって、西川町所在の岩根沢・本道寺・大井沢集落の考察が中心である。第四節「三山信仰の盛衰」では、出羽三山参詣者数を明らかにしようと試みており、また石碑と旅日記の残存状況から、出羽三山信仰の最盛期が19世紀前半だったと述べている。

「第三章 出羽三山参詣の道」も、六つの節のうち最初の四つまでが『西川町史 上巻』所収のものである。第一節「古地図に描かれた出羽三山」と第二節「名所図会にみる出羽三山」は、ともにヴィジュアルな史料を扱っている。第一節では、正保国絵図や「湯殿山論争絵図」などの古地図における出羽三山の記載が検討され、第二節では、『三山雅集』などの名所図会や絵画史料が紹介されている。続く第三節「著名人の三山参詣」と第四節「旅日記にみる三山参詣路」は、参詣記録を論じたものである。第三節では、大淀三千風・松尾芭蕉・高山彦九郎・斎藤茂吉の三山参詣記録が、該当部分の引用も含めて詳しく紹介されている。特に、前二者については、「これらの俳諧紀行が出羽三山信仰の流布に果たした役割は誠に大きなものであった」と評価している(「信仰の流布」と言いきっていいかどうかは、評者には疑問であるが)。第四節では、著者の探索した各地の旅日記をもとに、出羽三山の参詣行程・登拝行程が検討されている。第五節は、出羽三山の地獄と浄土について論じたもの、第六節は、天保14年の出羽三山旅日記の翻刻である。

「第四章 出羽三山信仰の諸相」は、『村山民俗』・『山形民俗』などに書かれた小文を集めたものである。第一節は著者の月山登山記、第二節は出羽三山の女人禁制について、第三節は遠野および岩手県の出羽三山信仰について(講演記録)、第四節・第五節は二つの出羽三山旅日記に関するメモ、第六節は即身仏関連の史料・文献紹介、第七節は評者が1993年に行なった著者の前著『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』への書評に対する回答、第八節は出羽三山信仰関係の書評3編であ

る。

本章第七節で、評者の拙評に対して、これを無視せず、著者から公に長い回答をいただいたことには深謝したい。本書によって、評者が長い評文を書いたということが、逆に知られるようになった面もあるようである。さて中身のほうだが、著者も述べるように、史料を伴った詳細な反論ではないため、著者の回答に素直に納得できるわけではない。また、評者の答えてほしいことに触れられていなかったり、逆に回答を求めていなかったことが書かれていたり、じれったさを感じる点もある。それらの中で⑫の桜井説の評価については、出羽三山参詣の地域差を提示している点で、建設的な著者の見解が出されており、小文中の白眉と言えよう。著者のこの回答に対して、評者から再度批評を試みるべきなのかもしれないが、評者は手元に出羽三山関係の資料をほとんど持っておらず、私論を展開するわけにもいかない。本拙評ですましておくことにしたい。

最後に、本書全体に対する感想を述べておく。本書は、学会誌に発表された論文を骨格とする前著『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』と違って、約半分を『西川町史』所収の論考が占めており、また他にも小論が多く、そういった面において論理的な読みごたえに欠けるのは事実である。また、前著と論旨が重複する部分が多く、内容的にもあまり新鮮味を感じない。特に、出羽三山をフィールドとせず、しかも土地勘のない評者は、その感を強くする。もちろん本書は、新たな資

料の発見なども踏まえて、出羽三山信仰の個別の事柄については、多くの新たな知見を散りばめているようである。出羽三山の研究史に疎い評者には、残念ながら、この点について適切なコメントができないが、資料的裏づけのない空論よりも、きちんとした事実の確認と提示が貴重であることは言を俟たないであろう。

なお、「あとがき」で著者も記しているが、図表や写真類が多く省略されているのは残念である。地理学側の読者のひとりとしては、もう少し地図を入れてほしかったというのが率直な感想である。

図表類省略の理由は、本書を学生向けのテキストとして使うことを考慮して、コストをおさえたためという。教科書として本書を見るなら、また別の書評のしかたもあろうが、どのような科目の教科書として本書を想定しているのかわからない以上、軽率な評言を記すのは差し控えるべきだろう。

いずれにせよ、自身の研究に基づく自身の著書を教科書にして授業ができることに若干の羨みを覚えながら、拙評を終えることにする。

〔付記〕

本稿執筆後、1997年11月に本書は第7回日本山岳修験学会賞を受賞したが、評者の読後感は上述のとおりである。

(小田匡保)